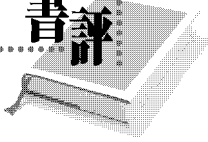


書評



上島国利, 三村将, 中込和幸, 他 編

EBM 精神疾患の治療 2006-2007

朝田 隆

医師の間ではすっかり浸透したEBM(Evidence Based Medicine)だが、このところ人気薄と聞く。一時の隆盛に対して「EBMは患者をみていない」、「経験や能力を否定する」との反発を生じたようだ。

ことに精神疾患の特殊性からか、我々にとってEBMは馴染みにくいところがある。だからこれまでは「俺流」の治療法に固執する精神科医が多かったのかもしれない。しかし今日では、「俺の治療法は標準的か?」と周囲を見渡す視座が求められる。つまり精神科臨床上の課題や悩ましい点を見きわめ、それに関する情報を入手して自分なりに消化していく姿勢である。

本書はそのような要請にずばり応えるものである。設問が素晴らしいことにまず感心する。選び抜かれた実践向きの設問が各項の冒頭に置かれている。実際これらの設問と同じテーマを扱った論文がLancetやJAMAといった一流紙の直近号にも少なからず掲載されている。たとえば「新規抗精神病薬と従来型抗精神病薬の効果の比較は?」という課題などその好例である。

さてEBMの実践は、①問題の明確化、②情報収集、③情報を吟味する、④最適な情報を適用する、という流れで行われる。従来にない本書の特徴の1つは、各稿がこの流れに沿った簡潔明瞭な構成になっていることにある。

私自身は、EBMの最大の問題点は、「経験や患者の個性を判断する方法論が確立していないこと」にあると思ってきた。つまりEBM

ではRCT(ランダム化比較試験)のデータが最重視される。ところがRCTの結果が日常臨床でそのまま使える場面は少ない。最後にもの言うのは、患者特性や自らの経験に立った医師の判断である。ここが難しい。この点に関して、本書にはさらなる練りがある。「コメント」欄が設けられ、ここで各筆者がそれぞれのご経験の中から手短に個人的印象の真髄を披露しておられる。これは読者の決定に大いに役立つものである。

さて筆頭編集者の上島先生がこの3月で昭和大学を退任された。先生にお声をかけていただいて数冊の書籍の編集にかかわらせていただいたことがある。悠然とした面持ちでときに乾いたユーモアを交えながら、内では創意工夫を凝らして全体を練り上げていかれるご様子に幾度も感服した思い出がある。本書もその雰囲気を用意している。

日常臨床で求められるのは、データ一辺倒の頭でっかちな医療でも、時代遅れのトンデモ医療でもない。あくまでバランスのとれた総合力である。本書は、読者が持つ過去の知識と今日の医療情報との溝を偏りなく埋めてくれる。上島先生の教授職時代の集大成にふさわしい仕上がりぶりである。末筆ながら、先生のさらなるご活躍を心からお祈り申し上げる次第である。

(筑波大学臨床医学系精神医学)

●B5 500頁 2005 定価9,240円(本体8,800円+税5%) 中外医学社